



難易度の高い英単語の学習方法に関する一考察: 『ジーニアス英和辞典』の調査を基に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2008-04-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 手塚, 順孝, 中田, 恭平, 山下, 真悟, 森谷, 雅子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005720

# 難易度の高い英単語の学習方法に関する一考察 --『ジーニアス英和辞典』の調査を基に一

手塚 順孝・中田 恭平・山下 真悟・森谷 雅子

北海道教育大学旭川校英語教育研究室

# A Note on Learning Less-Frequent English Vocabulary

— Based on the Research on Genius English-Japanese Dictionary—

TEZUKA Yoritaka, NAKATA Kyohei, YAMASHITA Shingo, MORIYA Noriko

Department of English Education, Hokkaido University of Education, Asahikawa, 070-8621

# 概 要

本研究は、難易度の高い、いわゆる10,000語レベルの英単語を分析し、学習するための一指針を提案するものである。英語の語彙学習、語彙習得に関する研究において、英語運用に不自由なく使いこなせるレベルとして10,000~20,000語レベルを指摘する研究が見られる一方、この語彙レベルにおける傾向や特色などに関する分析、リサーチ、研究はほとんどなされていない。本研究では、英語を学習する日本人学習者に広く使われている『ジーニアス英和辞典』<sup>1</sup>から10,000語レベルの名詞、動詞、形容詞・副詞を抜き出し、カテゴリー別に、その傾向を分析した。そしてその結果を基に、品詞別に効率の良い学習のあり方を提案した。

## 1 はじめに:英語語彙習得に関する過去の研究

英語の語彙学習、語彙習得に関する研究は、これまで様々な観点から研究されてきているが、大きく分けると、語彙の「何(what)」を、「いくつ(how many)」、「どのように(how)」習得すべきなのかという三つのタイプに分類することが出来る。その中でも、語彙数に関する研究は早くからなされている。古典的な研究として、Thorndike and Lorge(1944)の頻出別語彙リストがあげられる。彼らは、30、000の形態(lemma)の単語リストを挙げ、英語の先生が知っておくべき単語数を提案した。60年以上前から、どのような英単語を教えるべきかという研究がすでに提案されてきたと考えることが出来る。

<sup>1 『</sup>ジーニアス英和辞典』の3版、4版は語彙数が限られているため、本研究では『ジーニアス英和辞典』の2版を使用した。

その後、単語数に関する研究としては、辞書の語彙数の研究と母語話者の語彙数の研究に分岐していった。辞書に載っている語彙数の研究では、Goulden et al. (1990) などが挙げられる。彼らは『ウェブスター国際英語大辞典第三版(Webster's Third International Dictionary)』の語彙数を調べ、54,000語の語彙が含まれていることを示した。また Kucera(1982)は、頻度の概念を導入し、COBUILD English Language Dictionary を調査した。そして使われるコーパスのおよそ95%が15,000語レベルであると説明している。この COBUILD English Language Dictionary で示される語彙数は、母語話者の持つ語彙数と、おおむね一致している。例えば、Goulden et al. (1990) では、英語を母語とする大学生は、派生語も含め約17,200語を理解することができるとしている。また Nation(1990)では、18歳ごろまでには、17,600語の語彙数になると示している。

英語の母語話者が持っていると思われる語彙数と、第二言語としての英語を習得するために理想とされる語彙数は、概ね一致している。例えば中條&長谷川(2003)によると、ニュース等の音声英語では平均4,835語、新聞等の文字英語では平均6,535語に相当する語彙が内容を理解するために最低限必要であることが報告されている。さらに「楽に理解できる」レベルとして、音声英語では約14,000語が必要であると概算している。そして文字英語では14,000語でも足りないとの報告がなされている。

もちろん英語教育では到達目標として、もっと少ない語彙数を設定するのが通説ではあるのだが、これらの研究から覚えるべき理想の語彙数は、おおむね10,000語から20,000語の間に絞られていることが分かる。このように、語彙数の研究はある一定のレベルでなされているのだが、それらの語彙をどのように(how)習得すべきであるかという議論には到っていないのが事実である。植田(2000)は、数多ある英単語の学習教材の中で、10,000語レベル以上の単語を扱っていると明記している数少ない例の一つである。このように10,000語レベル以上の語彙を考慮した教材がほとんど見当たらないのが現状である。つまり単語集も一冊しか存在しないほど、教材開発が遅れていると結論づけざるを得ない<sup>2</sup>。

これはコミュニケーションを重視する,現在の英語教育全体の流れによるものである。1980年以降,アクティビティーを通して英語を自然に身につけていこうとするコミュニカティブ・アプローチ(Communicative Approaches)が主流になり,同時に語彙を付随的に学び取る implicit vocabulary learning(または accidental vocabulary learning)が主張されるようになった。つまりある程度のレベルから,習得した後は「使っているうちに覚える」ことが推奨されたのである。「多読による」付属的な語彙習得の研究が多い $^3$ のは,そのためである。

しかし多くの研究が、この implicit vocabulary learning による語彙習得だけでは不十分であるとも指摘している。例えば Nation and Coady(1988)では、未習得語の意味を推測しながら読解を行なっても、単に読み流すだけであり、語彙の習得につながらないとしている。 Lawson and Hogben(1996)も同様に、コンテクストの中で単語の意味を理解することと、コンテクストから単語の意味を習得することは違うと強調している。

ある文脈で偶然単語を理解できても、学習者がその単語を別の場面に応用できるかどうかは、全く別問題である。 implicit vocabulary learning 自体を否定しているのではないが、使っているうちに覚えるという

<sup>2</sup> このレベルの語になると、大学以上のレベルになる。一見すると中学校の英語教育において不必要な研究に思われがちであるが、決してそのようなことは無い。英語学習は中学校での学習で終わってしまうのではない。むしろ到達すべき目標を立て、それに向けて学習計画を行なう必要がある。そのためには、中学校では使われない語彙の研究であったとしても、目標をどこに設定するのかを決定づける重要な研究の一つである。

<sup>3</sup> Nagy & Herman (1987), Krashen (1989), Huckin & Bloch (1993), Luppescu & Day (1993), Nagy (1997)などを参照。

やり方だけではなく、覚えるべき語彙を抜き出し意識的に覚える explicit vocabulary learning がさらに必要となる。最近では、このような explicit vocabulary learning を進めるため、語の意味分析が、語彙数3,000 語から5,000語辺りのレベルでは見られ始めている $^4$ 。しかし教材の場合と同様、10,000語レベルではまだ皆無に近いのが現状である。

現実問題として、理想として必要である語彙数は示唆されても、学習方法については全く手をつけず、暗記に頼らざるを得ない。そのため、より効率よい学習、習得の仕方を模索することが求められていると考えられる。そこで本研究では、『ジーニアス英語辞典』から、10,000語レベルのものを抜き出し、その語彙にどのような言語学的特徴があるのかを報告する。そしてその中から、何を学ぶべきなのか、そしてどのように学ぶべきなのかを提言することを目的とする。

## 2 調査結果報告 I:名詞

本節では名詞の調査結果を報告する。2.1では10,000語レベルの語彙リストに含まれる名詞が、派生名詞と非派生名詞に大別されることを報告する。2.2では2.1で報告した派生名詞と非派生名詞の区別に基づき、各名詞の何(what)を学ぶべきなのかを提案する。2.2.1では、派生名詞の語幹を重視するべきであること、2.2.2では、非派生名詞を関連付けている意味フレーム(Semantic Frame)を学ぶ必要性を主張する。2.3では語幹と意味フレームを使った学習方法を提案する。

## 2.1 名詞に見られる傾向

『ジーニアス英和辞典』の10,000語レベルの語彙には約3,900語の名詞が含まれている。そのうち、動詞、 形容詞など別品詞の語彙に接辞をつけることで生成される所謂派生名詞(Derivative Noun)は約1,700語, それ以外の非派生名詞は約2,100語である。以下に挙げる(1a),(1b)はそれぞれ派生名詞と非派生名詞の例 である。

- (1) a . abandonment, manifestation, prospector, austerity, fairness, severity, bookkeeper, millstone, woodwork
  - b. gait, alliance, bump, coyote, mirth, trinket, potash, citadel, crockery, caw, iris, dirge, mileage, grange, elm, jot, Roosevelt, San Francisco

(1a)の派生名詞はさらにその語幹の品詞別に3種類に分けることが出来る。(1) abandonment, manifestation, prospectorに代表される動詞派生の名詞,(2) austerity, fairness, severityに代表される形容詞派生の名詞,(3) bookkeeper, millstone, woodworkに代表される名詞派生の名詞である。(1)の動詞派生の名詞は約900語,(2)の形容詞派生の名詞は約200語,(3)の名詞派生の名詞は約200語を数える。一方,(1b)の非派生名詞には, Rooseveltや San Franciscoといった固有名詞が約500語含まれる。以下では非派生名詞約2,100語からこの固有名詞約500語を差し引いた約1,600語を分析の対象とする。

## 2.2 派生名詞と非派生名詞

本節では派生名詞と非派生名詞に分けて、それらの語彙を学習する際、語彙の何(what)を学ぶべきで

<sup>4</sup> 認知言語学の研究を基に、語彙を体系化して説明している研究として、上野(2006)がある。

あるのかを論じる。派生名詞は、語の意味に加え語幹を、非派生名詞は語の意味とその意味を包含する意味 フレーム(Semantic Frame)を学ぶ必要がある。

## 2.2.1 派生名詞を形成する語幹

以下に動詞派生名詞をいくつか列挙する。

(2) acknowledgement, adoption, dealing, mender, reliance

これらの名詞の語幹はそれぞれ、acknowledge、adopt、deal、mend、rely といった動詞である。これら、名詞形成の語幹となっている動詞は、5,000語レベルの語彙である。さらに接尾辞も-tion、-ment、-ing、-er、-ance など種類も多くない。

次に、形容詞派生名詞をいくつか列挙する。

(3) audacity, consistency, eagerness, finality, meekness

これらの名詞の語幹は, audacious, consistent, eager, final, meek といった形容詞にそれぞれ対応する。 これら形容詞は, 5,000~10,000語レベルの語彙であり, 接尾辞は概ね-ity, -ency, -ness, -ity などに限られる。

同様に、名詞派生名詞を列挙する。

(4) companionship, druggist, mountaineer, householder, limestone, woodwork

これらの内, 前半3つは接尾辞を用いたものである。 companion-ship, drug-gist, mountain-eer に含まれる語幹, companion, drug, mountain は1,000~5,000語レベルの語彙である。一方,後半3つは名詞同士を合成 (compound) したものである。house-holder, lime-stone, wood-work はそれぞれ1,000~5,000語レベルの名詞に分類されるものである。

このように語幹に注意を払うことで、約1,700語を既習の語彙を元に、有機的に結び付けて学習することができる。語彙形成の過程と学習の効率のどちらを考えても、語幹を語彙学習に生かさない手はない。

## 2.2.2 非派生名詞を関連付けている意味フレーム(Semantic Frame)

非派生名詞はいくつかの意味フレーム(Semantic Frame)を元に分類することができる。今回は、19<sup>5</sup>の意味フレーム(移動、状態、人間、役職、争い、生き物、イベント、衣類、学問、加工、形状、言語、自然、社会、数字、食、場所、物質、量)を設定した。

以下の表1は非派生名詞を19の意味フレームに分類し、纏めたものである。尚、各意味フレームの後にあるカッコ内の数字は集計された単語数を表している。

語彙はそれだけで用いることはなく、常に文脈の中でその役割を果たす。この文脈こそが意味フレームであるととらえることができるなら、意味フレームを設定し、語彙を分類することで、ある語彙の使用場面ま

<sup>5 19</sup>の大フレームの下位構造として凡そ100の小フレームを設定した。たとえば、「社会」に関しては、家族、慣習、国、仕事、司法、宗教、神話、政治、制度、地区、農業、犯罪といった12小フレームが下位構造として存在する。

移動(110)	状態(48)	人間(252)	役職(216)
descent, promenade, influx, scalpなど	dilemma, pep, qualm, stupor, weal など	bairn, dwarf, knave, sexton など	admiral, bailiff, chef, dupe, quackなど
争い(82)	生き物(332)	イベント(43)	衣類(102)
brawl, row, combat, man-of-war など	heron, beech, raven, firefly など	gala, rivalry, orgy, tournament など	bib, gauze, fringe, twine, yarnなど
学問(130)	加工(302)	形状(74)	言語(73)
pornography, theology など	pedestal, crowber, canteen など	crease, lattice, fissure, など	meter, epistle, deary, ballyhooなど
自然(145)	社会(175)	数字(57)	食(79)
deluge, whiff, chasm icicle など	hierarchy, chore, rental theft など	mileage, tonnage sentinel など	beverage, cider, mush, starch など
場所(81)	物質(105)	量(27)	
brewery, tavern, flue tunpike など	enamel, gore, muck stein など	decimal, trinity, stub debrisなど	

表1:非派生名詞とその意味フレーム

で想起することが出来、且つ同じフレーム内の語彙にも注意が及びやすい。

### 2.3 学習方法

2.1では10,000語レベルの語彙リストに含まれる名詞を、派生名詞と非派生名詞に大別した。それに基づいて、2.2では、派生名詞の場合、語幹となっている動詞、形容詞、名詞を中心に学ぶこと、非派生名詞はいくつかの意味フレーム(Semantic Frame)を使って体系的に学習することの必要性を指摘した。本節では語幹と意味フレームを用いた学習方法を提案する。

まず、派生名詞に関しては、語幹となっている語彙をしっかりと理解していることが前提となる。3.2.1 でも示したように、派生名詞の語幹は5,000語レベルの基礎語彙がほとんどである。これらの基礎語彙を理解した上で、接頭辞、接尾辞の意味に注意を払って語彙学習を進めることで、丸暗記よりも効率的な学習が期待できる。

次に、非派生名詞に関しては、意味フレームを用いて語彙を学習することで、忘れにくく、実際の使用場面も理解できることが期待される。また、それぞれの意味フレームは独立しているのではなく、有機的に結びついていると考えられる。「人間」、「移動/状態」、「場所」などは更なる『人間生活』とでも称すべき大フレームに集約できるため、意味フレーム間の関連性にも留意した学習が必要である。

#### 3 調査結果報告Ⅱ:動詞

本節では、動詞の調査結果の報告を行なう。10,000語レベルに含まれる自動詞は約300語、他動詞は約800語とその数は決して多くない。またこのレベルになると、より具体的な動作や様子を示す動詞が増える。つまり、特定の文脈でしか使われないような語や、項として取ることができる名詞の種類がかなり限定されている物が多い。3.1では10,000語レベルの自動詞が表わす行為の種類を、3.2では同じく10,000語レベルの他動詞で表わされる行為の傾向を挙げ、3.3でそれらの有効な学習方法について考察する。

## 3.1 自動詞

自動詞はその動詞が表わす行為の性質を基準として、以下の七種類に分けることができる。括弧の中の数字はそれぞれいくつ単語があるかを表わしている $^6$ 。

- (5) a. 主語の指示対象がある場所に存在するもしくは属する (8)
  - b. 主語の指示対象が何らかの感情あるいは考えを持つ(23)
  - c. 主語の指示対象が実際に移動を伴って動く(48)
  - d. 主語の指示対象が移動以外の何らかの行為を行う (35)
  - e. 主語の指示対象が体の部分を動かす (26)
  - f. 主語の指示対象がある状態になる(94)
  - g. 何らかの音が鳴るもしくは光る (55)

(5a) は、reside や encamp など「ある場所に位置づけられる主語の指示対象の状態」がどのようなものかを述べるものと pertain、appertain などのように「主語の指示対象がある場所に属する」といった意味を表わすものがある。(5b) は、感情や認識を持つという意味を表わす語として aspire や wail、exult などがある。また賛成や反対の意見を持つという意味を表わす assent や dissent といった語も10,000語レベルの単語として挙げられている。また(5c) は、ものを見る際にどのように見るかを表わす gloat、peek といった語や bob、scud といった動きの様子を表わすもの、揺れる様子がどのような物かをあらわす jar や reel などがある。

(5d) は、(5c) のような「動き」ではなく、「行為」自体に焦点が置かれたもので atone や attest などがある。(5e) は、prance や sprawl など身体の動きに関わるものと scowl、hark、gape など顔の動きを表わすものの二つに大別することが出来る。(5f) は、この範疇そのものである accrue といった語に加え、「寝方」がどのようなものかを表わす doze や oversleep、健康状態などの変化を示す deteriorate、sicken などがある。また逆になくなるということを表わす語には swoon や dwindle と言った語が挙げられる。(5g) は、allude など実際に「話す」という行為に関わるものの他に grunt や snort など具体的な様子を示すもの、squeak や yelp など動物の鳴き声などもこの範疇に分類できる。 glimmer や shimmer などの物が光る様子を表わすものがある。

まずは、主語の指示対象が人であるか、人以外のものであるかの区別をすることが必要となる。つまり(5a) の多くは主語の指示対象が人間であるのに対し、(5c) はものである。このように具体的な様態が動詞の意味に組み込まれる自動詞を効率良く覚えるためには使われる文脈の理解と主語の指示対象が主にどのようなものになるのかを理解する必要がある。

# 3.2 他動詞

他動詞も自動詞同様,10,000語レベルではかなり具体的な意味を表わす語がそのほとんどを占めている。 まず特徴として,目的語となりえるものがかなり限定されている点があげられる。例えば sift は目的語として「粉」もしくは「砂」を取る。他にも trill であれば目的語には「歌」や「声」を, flay であれば「獣」もしくは「果実」がすぐに目的語の指示対象として連想される。またこのレベルになると,使われる文脈が

<sup>6</sup> この他に、(5a)から(5g)のどの範疇に含まれないような語や一見すると他動詞が表わすような意味を持つ語もあったが、 これらもかなり具体的な意味を帯びたものである。

かなり限定されるような語、特に、法律や政治、経済に関わる語が増えてくる。つまり、英字新聞を読み、理解するといった活動を行うためにはこのレベルの語は軽視できないのである。また10,000語レベルの他動詞を実際に使うために構文 $^7$ の理解は必要となるが、get や make といった基本的な語に比べ、意味がより具体的な分各々の他動詞が取る構文は、一つか二つに限定される。そのため、まずはその語自体がどのような意味を表わす語であるのかを理解してしまえば、自ずと構文も理解することができる。

井筒(2002)の動詞分類に従って分析すると「現れさせる」型、「無くする」型、「動かす」型はそれぞれ 200語弱確認される。10,000語レベルの他動詞の「現れさせる型」は、 depict や designate などのようにあるものをその場に現れさせるような語と blemish や consolidate などのようにあるものの状態を変化させる ものに大別される。

次に「無くする」型は abolish や demolish などがある。これらも法律や建物に関してのみ使われることが多い語であることから考えると、やはりかなり具体的な状況を表わす語が多いようである。「動かす」型は hurry や heave などのように単に何かを「動かす」というだけではなく、その様態がどのようなものであるかを示している。約30個ある「与える」型も、 dispatch や empower など与える物がかなり限定されている。

残りは800個ある他動詞のうち約40個ある「持つ」型と約60個ある「持つ型の異」型であるが、特に持つ型の異型に関しては、従来は他動詞と分析されてきた感情を表わすような動詞 benumb、 fag、 perturb などが通例受身で使われることを考えてもこれらをある種の形容詞とみなすといった工夫をすることが必要となる。また dub、 embalm、 ennoble、 refute、 enthrone のようにある、文化特有の文脈でしか使われないような語もこのレベルには含まれている。

このようにその語自体の語義をつかむことが大切であるのに加え、それがとりわけどのような文脈で、どのような目的語を取りえるのかを併せて覚えることがこのレベルの他動詞を学習する際には必要となる。

# 3.3 学習方法 (how)

3.1, 3.2で見てきたように10,000語レベルの動詞は自動詞であれ、他動詞であれ、かなり具体的な意味を表わす語がその大半を占めている。これらの語を学ぶためにはまずそれぞれの語が抽象的にどのような行為を表わすものなのかを理解することが必要である。自動詞であれば、その語がまず「見る」、「感情を持つ」、「回転する」など、他動詞であれば「作る」、「壊す」、「させる」、「感じる」といった行為に分けて理解し、その後、実際にどんな様態でそれらの行為が行われるかを理解していくことで、認知的な負担を最小限に抑え学習することができる。つまり10,000語レベルの動詞は be, look, move, get, have, give, make といった基本動詞が表わす出来事の「様態」がどのようであるかを表わすものが大半を占めている。したがって、10,000語レベルの動詞は「基本動詞+副詞」から出来上がっていると理解することで、これらの語彙学習を促進することになるのではないだろうか8。

## 4 調査結果報告Ⅲ:形容詞・副詞

本節では、抽出した形容詞・副詞の分析をする。4.1で統計的な傾向を示し、4.2では語彙の構成要素と格 形態素について学ぶべきであることを示す。4.3では学習方法に触れ、4.3.1では形容詞、4.3.2では副詞の

<sup>7</sup> この論文で使われている「構文」という概念に関しては、Goldberg (1995)を参照。

<sup>8</sup> 詳しい議論に関しては、Talmy (1985) を参照。

学習方法をそれぞれ提案する。

#### 4.1 形容詞・副詞に見られる傾向

この調査で抽出した10,000語レベルの形容詞の総数1,552語のうち802語,副詞の総数446語のうち311語が, 難易度の低いレベルの語彙を語幹に持つものであった。語幹の難易度に注目して分類した場合,以下のよう になった。カッコ内の数字は語彙数であり、右に挙げたのは具体的な語彙の例である。

## (6) a. 〈形容詞〉

- 1) 1,100語レベルの語幹を持つ合成語(45): lighthearted, painstaking, worthwhile, etc.
- 2) 1,100語レベルの語幹を持つ語 (166) : childlike, lawless, unfair, waterproof, etc.
- 3) 4,800語レベルの語幹を持つ合成語(29): automotive, newborn, thoroughbred, etc.
- 4) 4,800語レベルの語幹を持つ語(562): abnormal, insufficient, transatlantic, etc.

## b. 〈副詞〉

- 1) 1,100語レベルの語幹を持つ合成語(4): everyplace, offhand, beforehand, etc.
- 2) 1,100語レベルの語幹を持つ語(47): angrily, seaward, awhile, etc.
- 3) 4,800語レベルの語幹を持つ合成語(1): upstream
- 4) 4,800語レベルの語幹を持つ語(259): cheerfully, faintly, apace, soothingly, etc.

また, 難易度に関わらず, 形容詞では993語(名詞:479, 動詞:336, 形容詞:171, 前置詞:3, 副詞:3), 副詞では391語(形容詞:368, 名詞:22, 副詞:1) が語幹に別の品詞を持つ, いわゆる派生語であった。

こうした統計的傾向から、このレベルの形容詞・副詞は個々の語彙の意味に注目して学習するというのではなく、語幹や接辞(接尾辞・接頭辞、派生接辞、否定接辞など)、派生関係に注目して学習することで、大量の語彙を機械的に暗記するということが避けられる。語幹に注目することで、新規に覚えなくてはならない語彙は半数まで絞ることが出来、また、派生関係に注目することで7割を越える語彙を他の品詞と関連づけながら学習することになる。従って、この二つの品詞に関しては、語彙自体が持つ意味よりも構成要素に注目し、既習語彙(より難易度の低いレベルの語彙)の知識を利用する学習方法を提案する。

## 4.2 構成要素,各形態素

語彙の内部構造を分析するためには、どのような形態素があるのかを学ぶ必要がある。その語彙が動詞派生のものであれば、現在分詞形・過去分詞形がそれぞれに持つ意味、名詞派生であっても同様の形式を持つ場合には、それぞれどのような意味を持つのかを知る必要がある。例えば、動詞派生で過去分詞形である。 abandoned、homemade などが受け身の意味を持つのに対して、determined、traveled などは、受け身ではなく完了であり、redheaded、lighthearted などの名詞派生の過去分詞形の場合は、「~を持っている」という受け身でも完了でもない意味になる。各否定辞の形式と意味、対応関係にある否定辞の付かない語彙、例えば lawless/lawful、fit/unfit、uncertainly/certainly、などを、関連づけて扱うことで同じ語幹を持つ複数の語彙を学習することになる。否定の接頭辞である il-, ir-, in-, im-, など、同じ意味を表わす接辞でも前後の音韻環境によって異形体を持つものがある一方で、indebt の in は形式上否定の接頭辞と同じに見えるが否定の意味は持っておらず従って、異なる接辞である場合もあるので、それらを区別する必要がある。また、-less や-full は名詞と、-able は動詞など、各接辞はどの品詞と結びつきやすいのかなど、語

彙構成を形態素が持つ意味に対応させながら学ぶ。

次に、語幹を形成している自由形式だけではなく、拘束形態素を学ぶ。 antecedent の ante-や、 aquatic の aqua-, などが、そうした拘束形態素の例である。複数の構成要素が汲み合わさっているものとして語彙を見ることが必要である。 unwillingly (will) や、 faithfully (faith)、 irresistible (resist) や transcontinental (continent) など、語彙の中に既習の形態素が含まれている場合、形態素の意味に基づいて語彙全体の意味を推測することがある程度は可能となる。

語幹部分の難易度がより高いレベルの語彙(例:fondly, ruefully, sophisticated, invincible など)は、 語彙自体というよりも、語幹になりうる形態素を学習する。接辞や拘束形式などの形態素を伴わない語彙(例 :aft, hither, thence, sleek, sylvan, void など)は、他とは区別して学習する。

従って、このレベルでの学習内容は、1) 語彙の内部構造を見分けること、2) 語彙全体ではどのような意味になるのか推測すること、3) 難易度がより高い形態素を覚えること、の3つに大別できる。

このレベルの語彙を効率よく学習するためには、既習の語彙知識を活用することが有効である。従って、 既習知識で対応できる語彙とそうでない語彙に分類して、前者は分析を通して理解しながら既習知識と関連 づけて学習し、後者は接辞を取り除いて語幹を学習することで、機械的な暗記を避けられることになる。

## 4.3 学習方法

上で示したように、このレベルでは語彙がどのような構成になっているかを見分けることを学ぶべきである。つまり、語彙を構成する形態素を見分けることで語彙全体が意味するところを推測出来れば、このレベルの語彙の多くを学習したことになる。またこの方法は、より難易度の高いレベルの語彙を学習する際にも役立つはずである。

## 4.3.1 形容詞

形容詞を見た場合は、既習語彙知識を参照することで十分対応し、語彙自体は初めて見たとしても形態素の知識を利用して意味を推測したり他の語彙と関連づけて学習することが出来る。やはり新規に覚えるべき語彙は抽出の約半数にしぼられることになる。動詞派生の形容詞は、現在分詞形・過去分詞形、それぞれの形式が持つ意味の知識を利用すれば、形容詞の意味に加えて動詞の意味も強化することになる。つまり、形容詞においても語彙構成を分析することによって語幹や接辞を見分け、それら各要素が表わしている意味も分析しながら学習することによって、単一の対象品詞のみではなく関係を持つ(否定・非否定、他動詞・自動詞、副詞・形容詞、名詞など)他の品詞の語彙も学習することになる。

形態素に注目し語彙構造を分析しながら語彙学習を行うという方法は、既習語彙の定着のみではなく難易度の高い語彙の学習でも採用し得る。特に、-ic、-al、-ive、-ful、-ous、など品詞を変化させるような接辞や、-less、un-、dis-など否定の意味を付加する接辞の知識を持つことで、複数の品詞にまたがる語彙学習を一度にしていることになる。そのような学習方法は、一気に語彙数を増やすことが可能であり、学習者に大量の機械的暗記を強いることの無い、つまり学習者への負担が比較的少なく有効である。

#### 4.3.2 副 詞

すでに示した通り、このレベルの副詞は接尾辞-ly を伴い、形容詞から派生しているものが大部分を占めているため、副詞を学習する場合には、形容詞と関連づけて学習することが有効である。

まず、各副詞を構成している語幹部分に注目し、各接辞を取り除いた語幹をとりだす。次に、その語幹部分が自由形式の場合にはその難易度レベルに従って分類を行う。例えば、sooth-ing-ly (sooth)、

uni-form-ly(form),un-necessari-ly(necessary)などのように語幹の既習知識から語彙全体の意味が推測できるものと,そうでない fain,askance,nay などを選り分けることで,労力を要し集中的に覚えるべき語彙と,既習知識を活用して軽い負担で大量に処理できる語彙を区別し,それぞれに合った方法で学習することができる。副詞に関しては,このレベルで新規の形態素として学習すべき語彙数はかなり限られている。全体数から難易度の低い語幹を持つものを除けば,新規に覚えるべき副詞の数はかなりしぼられる(4.1参照)から既習の語彙知識を強化することになり,さほど労力が必要ない。結果,かなり限られた数の副詞を,集中的に学習する事が出来る。大量の語彙を暗記する方法よりもはるかに効率よく確実に語彙数を増やすことに繋がる。

## 5 さいごに

本研究では、10,000語レベルの英単語の性質を考察すると共に、どのような学習方法が可能なのかを示唆してきた。その結果、名詞に関しては派生語と意味フレームという二つの枠を設ける必要性を論じてきた。また動詞は目的語にくる名詞野意味的性質と動詞が持つ意味を基にして範疇分けを行ない、より体系化した語彙学習の可能性を報告した。どちらも、意味を基盤にしてまとめることの重要さを主張している。一方、形容詞・副詞は既存の語からの派生であることが多いため、意味を基盤にした範疇分けというよりも、むしろ派生語として学習していくことの必要性を中心に論じてきた。

どの例においても、別の新しい語彙を覚えるというより、既存の基本単語の知識を応用して、それを意味的に範疇化されたもの(名詞、動詞)、または形態論的に派生したもの(名詞、形容詞・副詞)として捉えることが大事であることが確認された。今後の課題として、言語学における各分野(形態論、統語論、意味論など)の枠組みをより加味した研究が必要であると考える。また難易度の異なる語彙の分析との比較も大事な課題の一つである。例えば10,000語レベルより難易度の高い語彙の分析、また逆に難易度の低い語彙の分析(つまりより基本となる語彙)からデータと比較対照し、英語教育の中で「理想」とする語彙数に向けた、中学から大学に至るまでの語彙指導を模索する必要があるのではないだろうか。

#### 参考文献

井筒勝信. 2002. 『場所と力―意味に基づく英文法序説―』. 東京: 現代工学社.

植田一三. 2000. 『発信型英語 10000語レベル スーパーボキャビル』. 東京:ベレ出版.

上野義和,森山智浩,福森雅史,李潤玉. 2006. 『英語教師のための効果的語彙指導法 – 認知言語学的アプローチー』. 東京: 栄宝社.

中條清美,長谷川修治. 2003. 時事英語の授業で用いられる英文素材語彙レベル調査—BNC (British National Corpus) を基準にして—. 『時事英語学研究』. 51-62.

Bauer, L. and P. Nation. 1993. Word families. International Journal of Lexicography, 6: 253-79.

Goldberg, A. 1995. Construction: A Construction Grammar Approah to Argument Structure. Chicago: University of Chicago Press.

Goulden, R. P. Nation and J. Read. 1990. "How large can a receptive vocabulary be?" Applied Linguistics, 11-4: 341-363.

Huckin, T. and J. Bloch. 1993. "Strategies for Inferring Word-Meanings in Context: A Cognitive Model" In T. Huckin, M. Haynes, and J. Coady, eds., *Second Language Reading and Vocabulary Learning*, 153–178. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation

Krashen, S. 1989. "We acquire vocabulary and spelling by reading: Additional evidence for the Input Hypothesis" *Modern language Journal* 73: 440–464.

Kucera, H. 1982. "The mathematics of language" in American Heritage Dictionary, Boston: Houghton Mufflin.

#### 難易度の高い英単語の学習方法に関する一考察

Nagy, W. E. and P. A. Herman. 1987. "Breadth and depth of vocabulary knowledge: Implications for acquisition and instruction" In M. McKeown and M. Curtis, eds., *The Nature of Vocabulary Acquisition*, 19–35. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Nagy, W. E. 1997. "On the role of context in first- and second-language vocabulary learning" In N. Schmitt and M. McCarthy, eds., *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*, 64–83. Cambridge: Cambridge University Press.

Nation, P. 1990. Teaching and Learning Vocabulary. Boston, MA: Heinle & Heinle.

Nation, P. 2001. Learning Vocabulary in Another Language. Cambridge: Cambridge University Press.

Nation, P. and J. Coady. 1988. "Vocabulary and reading" In R. Carter and M. McCathy, eds., *Vocabulary and Language Teaching*, 97–110. London: Longman.

Lawson, M. J. and D. Hogben. 1996. "The vocabulary-learning strategies of foreign-language students" *Language Learning* 46–1: 101–135.

Luppescu, S. and R. R. Day. 1993. "Reading, dictionaries, and vocabulary learning" Language Learning 46-1: 263-287.

Talmy, L. 1985. "Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms." In T. Shopen, eds., *Language typology and syntactic description: Grammatical categories and the lexicon*. Volume 3. Cambridge: Cambridge University Press.

Thorndike, E. and I. Lorge. 1944. The Teacher's Wordbook of 30,000 Words. NY: Columbia University Teacher's College.

(手塚 順孝 旭川校准教授)

(中田 恭平 旭川校院生)

(山下 真悟 旭川校院生)

(森谷 雅子 旭川校院生)